

木下杢太郎と外来の染織品
先川直子（目白学園女子短大）

〔目的〕木下杢太郎(1885～1945)は明治40年代に南蛮詩といわれる数多くの詩を作っており、その中には、東京帝大医科在学中の、22歳の夏の作品である「邏羅染」「棧留縞」などの異国的な外来の染織品を取り上げたものも見られる。しかし、骨董趣味のある初老の人物ならともかく、20歳を過ぎたばかりの医科の大学生である杢太郎が、なぜ、このような詩を作ったのか、作れたのかという疑問が生じる。本研究は杢太郎のそれらの染織品への関わり方と、それを可能にした背景とを明らかにすることを目的とする。

〔方法〕主な資料としては『木下杢太郎全集』全25巻(岩波書店)を使用し、まず作品中に登場する外来の染織品、および杢太郎のそれらへの関わり方を調べる。次に彼の周囲の文学者達の作品と比較検討することによって、他の人々と杢太郎との染織品への関わり方の相違を浮き彫りにする。

〔結果〕木下杢太郎は明治18(1885)年に静岡県賀茂郡湯川村の呉服・雑貨等卸小売商の家に生まれ、東京帝大医科卒業後、各地の大学を経て母校の教授になり昭和20(1945)年に60歳で没したが、公務の傍ら多くの文学作品を残している。特に、明治40年に新詩社の同人になると、同年8月の与謝野鉄幹をリーダーとする九州旅行に、北原白秋らとともに参加し、帰京後に多くの南蛮詩を書きだすのであり、そこには古渡更紗、邏羅染、インド更紗、ジャワ更紗、ロシア更紗、棧留縞などの多岐にわたる染織品が登場する。しかし、他のメンバーの作品中には見当らず、この傾向は杢太郎のみに特有のものである。したがって、若くして示したこれらの染織品への強い関心は、九州旅行を契機としてはいるものの、生い立ちからくる染織品全般への深い知識に裏打ちされたものであったのである。